

北京市の図書館と「東亜同文書院」関係資料

愛知大学大学院中国研究科後期博士課程 藤森 猛

七月末より一カ月間、大学院の中国調査(第一期)として北京市を訪れる機会を得た。調査の終わりの僅かな時間を利用して、北京市の図書館における東亜同文書院関係資料の所在状況を調べてみた。なお今回の図書館利用にあたっては、中国社会科学院歴史研究所で日中関係史がご専門の夏応元教授、中国社会科学院研究生院で中国文学がご専門の李存光助教授の協力をいただいた。

1 中国社会科学院歴史研究所図書室(朝陽区建国門外)

北京の中心、天安門から長安街を東へちようど三キロ行くと、旧城区の出口である建国門(この門は現存しない)に出る。その建国門を挟み、西が中国社会科学院本部で、その東百メートルにあるのが中国社会科学院歴史研究所である。この辺は現在大使館、外資系のオフィス・ホテルが立ち並び、歴史研究所の向かいには長安街をはさんで、あの万里の長城と富士山の名をとって命名した「長富宮飯店」(ホテルニューオータニ)がある。

さて、ここには社会科学学院の二つの研究所があり、図書館の利用時間は、通常午前八時から十一時半までと、午後一時半から四時頃までとなっている。これは北京市の他の図書館にも共通した会館時間となっている。ただし、今回訪中した期間は夏期休暇中であり、例えば中国社会科学院研究生院の図書館では、夏休み中は図書館の開館を一週間に一度に限定(ただし雑誌コーナーだけは週三回)しているように、長期休暇中の開館期日・利用時間の特別措置をとるところもあつた。また部外者が図書室を利用する場合は、紹介状がないとこれらの施設を利用することができないのも、中国の図書館利用の特徴となっている。

○目録カード数

(著者が東亜同文書院または東亜同文会の書籍)

東亜同文書院(支那研究部) 1枚

東亜同文会 2枚(同一のもの)

「資料目録」(東亜同文書院支那研究部、昭和15年)と「対華回顧録」(東亜同文会編、1959)だけしかなく、

両方とも現在書庫にないといわれた。またここは、中近世関係の書籍が多いと聞いてきたが、全体として目録カードの数が少なかった。

2 中国社会科学院文献情報中心（東城区王府井大街）

長安街の北京飯店から北京の銀座通りといわれる王府井の大通りを二キロ北に行くと、中国美術館に着く。その南側にこの文献中心がある。この一帯は、北京の第一級商業地区の一つで、近くに北京第一の建築規模をもつデパートとなった「隆福大厦」があり、道をはさんであの老舎の「茶館」を上演した北京人民芸術劇院のホーム劇場である「北京首都劇場」がある。また真向かいには改修されたばかりの「華僑大厦」（ホテル）がある。

ここは、社会科学院の三つの研究所が一緒になっていて、歴史関係の目録のうち古代のものが多く、全体としての蔵書数も多い。また、利用者の中には金髪の青い目の人も混じっていた。ただ一つ残念なことはコピーの問題であり、ここでは本人が直接コピーできないばかりか、コピーをするには全部で三回手続きをしなくてはならない。あのプリペイドカード式の愛大図書館のコピーが本当に懐かしかった。このコピー機は、北京の図書館では、設置してない場合や置いてあっても壊れている場合が多く、また本人自らコピーできないということが共通していた。

○目録カード数

東亜同文書院（支那研究部）

1枚

東亜同文会

21枚

なおカードには、東亜同文書院支那研究部の「現代支那

講座」の第二講から第六講までの名が記してあったが、実際に所蔵されていたのは、第二講から第五講までであった。またこの本はどれもその中に「北京近代科学図書館」という日本の図書館蔵印が押してあった。それにしても中国大陸で埃をかぶった東亜同文書院の本を手にするのは、なにか特別な感がある。

3 北京市図書館（海淀区白石橋路）

日本へ帰国する当日、北京市の図書館に立ち寄った。

北京市図書館は、以前は安定門南東の孔子廟の地にあったが、1989年を境に天安門から北西七キロの海淀区にその中心が移された。この海淀区は北京大・清華大をはじめ、有名大学・全国重点学校が目白押し教育区である。この北京図書館は東西に北京動物園と紫竹院公園に挟まれ、あの釈迦の足跡が残っているといわれる「五塔寺」のすぐ近くにある。道の向かいに「奥林匹克飯店」（オリンピックホテル）がある。

この図書館は建物、蔵書数ともに市内最大級であり、たいへん清潔な図書館であった。また図書目録が、一般の図書館が漢字の画数で引くのに対し、拼音（ピンイン）表記で引けるのが、大きなメリットとなっている。閲覧者は「図書館閲覧索書単」（図書貸し出し申し込みカード）有料に書名等を書いて申し込む。一方この図書館は他の図書館と異なり、毎週土曜日が休館日であった。また市の図書館ではあるものの、「工作証」、「学生証」等を持ってない市民は図書館に入ることができず、大学生でも3年生以上でないという図書館規定があることを聞いた。

どこかの国の国会図書館に少し似ているような気がした。

○目録カード数

東亜同文書院 0枚

東亜同文会 7枚

この中には「支那省別全誌第六卷」（東亜同文会1918）などが含まれていた。

以上の三つの図書館において、「東亜」、「上海」、「南京」という項目から、著書名・著者名の両面より同文書院関係の書籍ストック状況を目録カードで検索してみた。また今回は、昨年度中国研究科の後藤峰晴さんが上海で行なった調査結果から、同文書院の資料は中国全土至る所に散らばっている可能性が高いという確信をもち、行なってみた調査である。ただし今回は事前準備なしの飛び込み調査であり、また作業は僅か一日や二日の日程であるため、不備な点が多かった。しかしながら、東亜同文書院関係の書籍が、上海や南京以外の地でも眠っていることは、多少なりとも明らかになった。

昨年度から、大学院の中国研究科共同研究室で、山田順造氏から寄贈された孫文、山田良政・純三郎兄弟の資料整理を開始した。この山田兄弟は、南京同文書院ゆかりの人物であり、順造氏自身も東亜同文書院出身である。またこの資料整理作業の過程で、生まれて初めて孫文の声をテープで聞く機会に恵まれた。その声は完全な広東語で、「普通話（標準語）」を学習しただけの者には、言っていることの意味がわからない。しかし順造氏の父山田純三郎氏は、孫文の秘書がわりとしてその生涯を共にしている。言葉の面からだけでも、純三郎氏の並々ならぬ苦勞を察することが

でき、またひたむきな津軽人気質を感じる。この山田兄弟の歩みを知ることが、いうまでもなく同文書院の歴史の紐を解くことでもある。その意味においても、今後中国全土の図書館等に埋もれている東亜同文書院関係資料をリストアップする作業は、意義を持つてくると思う。さらにその同文書院資料が、国民党政府や共産党政府の接収を経て、どのようなルートで現在の図書館へ辿り着いたかを明らかにできれば、新たな歴史のページを垣間見ることができのではないかと思う。